

英語語法文法学会

第31回大会資料

日時： 2023年10月21日（土）

開催校： 桜美林大学 町田キャンパス

住所： 〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
<https://www.obirin.ac.jp/about/campus/machida.html>

順路：

■ 新横浜駅から

JR 横浜線にて約 26 分、「淵野辺駅」下車、スクールバスにて約 8 分、「桜美林大学町田キャンパス」下車

■ 新宿駅から

小田急線にて約 36 分、「町田駅」下車、JR 横浜線にて約 6 分、「淵野辺駅」下車、スクールバスにて約 8 分、「桜美林大学町田キャンパス」下車

■ 町田バスセンターから

乗場 3 から「小山田桜台（ヤマダサクラダイ）」行きにて約 30 分、「桜美林学園」下車

英語語法文法学会

The Society of English Grammar and Usage

September 2023

英語語法文法学会 第 31 回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,000 円 学生 1,000 円

日 時：2023 年 10 月 21 日（土）

<当日は大学の食堂が利用できません。各自、昼食のご準備をお願いします。>

開催校：桜美林大学 町田キャンパス

住所：〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758

<https://www.obirin.ac.jp/about/campus/machida.html>

開催校委員：山岡洋

大会実行委員：松原史典（委員長）、吉川裕介（副委員長）、住吉誠、出水孝典、
山岡洋、吉田幸治

- 司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室（徳望館 3 階 AT-305 教室）
- 大会本部・運営委員会室（徳望館 3 階 AT-301 教室）
- 一般休憩室（徳望館 3 階 AT-302 教室）
- 書籍展示（徳望館 4 階 AT-402, AT-403 教室）

受付：10 時 00 分より 徳望館 1 階

ワークショップ（徳望館 4 階 AT-401 教室） 10:30 – 11:45

司 会 濱松純司（専修大学）

1. 「移動を表す前置詞句について」…………… 西前明（函館大学）
2. 「名詞 interest に後続する句」…………… 桑名保智（旭川医科大学）
3. 「談話標識の but と対応する日本語の逆接表現」…………… 田岡育恵（大阪工業大学）

受付：12時30分より 徳望館1階

研究発表 13.00 – 14.45

第1室（徳望館4階 AT-401教室）

司会 都築雅子（中京大学）

1. 「Deny の持つ否定意味解釈—否定辞繰り上げとの関連から—」
..... 伊藤一輝（東京外国語大学大学院）
2. 「2種類のことわざ表現 No X, no Y 構文—X の勧め・No X の勧め—」
..... 田村心（筑波大学大学院）
3. 「現代英語における speak of the devil の生産性と創造性」... 山内昇（大同大学）

第2室（徳望館4階 AT-404教室）

司会 谷光生（京都女子大学）

1. 「非制限現在分詞関係節の派生的性質」..... 高松龍（東京大学大学院）
2. 「英語の「特別用法」の it をめぐって—日本語の指示表現との関連から—」
..... 山本茉莉、山内信幸（同志社大学大学院、同志社大学）
3. 「パラダイム内ギャップへの補完操作とその拡張力の段階性: people worldwide から people globally への拡張プロセスを事例に」..... 松田佑治（名古屋学院大学）

総会（徳望館4階 AT-401教室）15.00 – 15.20

総会司会 前川貴史（龍谷大学）
開会の辞 会長 中澤和夫（青山学院大学名誉教授）
学会賞・奨励賞選考報告 会長 中澤和夫（青山学院大学名誉教授）
事務局報告 事務局長 西脇幸太（愛知文教大学）
会計報告 会計 佐藤健児（日本大学）

シンポジウム（徳望館4階 AT-401教室）15.35 – 17.45

テーマ「現代英語に見る歴史の痕跡」

司会 野村忠央（文教大学）

1. 「英語の経験事実から見た偏流理論、一方向性仮説」..... 野村忠央（文教大学）
2. 「"Be not afraid" —現代における定形の be を考える」
..... 村上まどか（実践女子大学）
3. 「歴史的変遷からみた現代英語における文法的主語の頻度」
..... 家口美智子（金沢大学）
4. 「BE 動詞に刻まれた言語進化の痕跡」..... 保坂道雄（日本大学）

閉会の辞 山岡洋（桜美林大学）

懇親会 19.00 – 20.30 プラネット淵野辺キャンパスの1階（淵野辺駅から徒歩約1分）（懇親会費：一般 5,000円 学生 3,000円）

移動を表す前置詞句について

西前明（函館大学）

across the street、down the slope、through the tunnel のような前置詞句について考察する。これらの前置詞句は、(1) She walked across the street. のように、移動を表す動詞と共に用いられる一方で、(2) There is an old lady across the street. のように、そのような動詞がない文にも現れる。両者の用法の意味の共通点と相違点を記述することが目的である。まず、問題の前置詞句を移動を表す前置詞句とみなす。さらに、移動を表す前置詞句には、主語 (or 目的語) の移動を表すものと話し手 (or 聞き手) の移動を表すものがあると仮定する。

(1) の例の前置詞句は主語の she の移動を表すと考えるが、このような解釈は前置詞句単独で得ることはできず、移動を表す動詞と共に起る必要があると主張する。一方、(2) の例の前置詞句は an old lady の位置を示すが、その移動は表さない。しかし、このような前置詞句も、話し手 (or 聞き手) の移動を仮定することによって、(1) の例の前置詞句と同じく、移動を表す前置詞句とみなすことができないかを検討する。

名詞 interest に後続する句

桑名保智（旭川医科大学）

本発表は、名詞 interest に後続する句に関して、形容詞 interested と比較しながら、容認可能性および意味の記述を行うことを目的とする。「... に興味をもつ」を意味する形容詞 interested は前置詞 in と動詞の ing 形によって構成される前置詞句 (in V-ing) に後続されるのが一般的だが、「原因」、「熱望」、「条件」を意味する場合は to 不定詞 (to V) に後続される (石橋 (編) (1966))。このことは次の疑問を生じさせる。形容詞 interested と派生の関係にある名詞 interest も in V-ing および to V に後続されるのだろうか。そうだとすると、その意味はどのようなものになるのだろうか。形容詞およびその派生名詞に後続する句の形式と意味との関係についての先行研究としては八木 (1998) などを挙げるができるが、本発表で扱う interest について詳細に論じている研究が多いとは言えない。

本発表では実例の観察およびインフォーマント調査により、名詞 interest に後続する句として最も一般的なものは in V-ing であり、to V は容認可能性が低下することを述べ、その理由を考察する。

談話標識の but と対応する日本語の逆接表現

田岡育恵（大阪工業大学）

発表では、辞書にある口語用法の but の例文の和訳に逆接表現を用いることができるのかどうか、また日本語でも同様に、接続助詞の「が」、「けれども」、接続詞の「しかし」に口語用法があるが、それらの例文の英訳に but を用いることができるのかどうかについて考える。たとえば、(1) のような but の和訳に日本語の逆接表現は適切ではない。

(1) a. It'll be a great party—everyone, but everyone, is coming. (LDOCE⁸)

b. みんな (×しかし/×けれども) みんな来ますよ。

(2) の「しかし」は、相手についての先入観無しにその働きぶりに感心した時に発せられるが、but では相手の働き方が十分ではないという想定否定が想起される。他方、(3) のように、間投詞を伴う、あるいは感嘆文が続く場合は、そのような想定無しに思わず発せられた but のように思われる。

(2) a. しかし君もよく働くねえ。(『新明解国語辞典』第 8 版)

b. But you work very hard.

(3) Heavens! But it's raining! やれやれ雨になっちゃった。/ But how lovely! (それにして) 全くきれいだなあ。(『研究社新英和大辞典』第 6 版)

このような日英語の比較から、but の口語用法について考察したいと思う。

研究発表 13.00 - 14.45

第 1 室 (徳望館 4 階 AT-401 教室)

司会 都築雅子 (中京大学)

Deny の持つ否定意味解釈—否定辞繰り上げとの関連から—

伊藤一輝 (東京外国語大学大学院)

本発表では deny という動詞が内在的に持っている否定の意味がどのように解釈されるかについて扱う。特に従来 Horn (2020) や Hoffmann (2022) で部分的に記述されてきた deny の用法では捉えきることができないデータがあることを指摘し、deny の用法を再検討していく。

問題となる deny の用法は以下の例文の対比から明らかになる。なお例文は基本筆者が作ったものであり、それらは全て英語ネイティブスピーカーによるチェックを受けている。

(1) John denied Mary that he madly liked her.

(2) John denied Mary the rumor that he madly liked her.

ここで重要になってくる点は 2 つある。① deny は (1) のように否定の発話動詞としての用法も可能である。② deny が内在的に持つ not の解釈に関して、(1) では従属節否定のみが可能である一方、(2) では従属節否定と主節否定の両方が可能になる。本発表では ② を重点的に扱う。特に否定副詞 not に頼らない形式で否定辞繰り上げ現象が起きているかのような否定意味解釈が生まれることがあると主張する。この主

張を裏付ける根拠として前後文の繋がり、否定極性項目の 2 つをあげながら、deny の用法を記述していく。

2 種類のことわざ表現 *No X, no Y* 構文—X の勧め・No X の勧め—

田村心 (筑波大学大学院)

本発表は、「X がなければ Y もない」という意味のことわざ表現 *No X, no Y* 構文 (e.g. (1a)) について考察を行う。

(1) a. *No pain, no gain.*

b. *If there is no pain, there is / will be no gain.* (Dancygier and Sweetser (2005: 260))

従来の研究では、(1a) のような *No X, no Y* 構文は、(1b) の if 条件文に言い換えられることから、条件的命題内容を表すと分析されてきた。

この意味的性質を踏まえ、本発表では、赤塚 (1998) の「話者による事態の望ましさ (Desirability)」という主観的モダリティの観点から、*No X, no Y* 構文は 2 タイプに分類でき、条件的命題内容よりも、そこから得られる間接的な内容 (間接発話行為) のほうを主に伝達していると提案する。1 つ目のタイプ (e.g. *No pain, no gain*) は、帰結節に対応する内容が望ましくないものとして判断され、No X で表される命題の裏命題を表す X の内容を聞き手に勧める。2 つ目のタイプ (e.g. *No muss, no fuss*) は、帰結節に対応する内容が望ましいものとして判断され、No X の内容を聞き手に勧める。

現代英語における *speak of the devil* の生産性と創造性

山内昇 (大同大学)

本研究が対象とする *speak of the devil* (噂をすれば) は、会話の話題として既出の人物が発話場面に偶然現れた際に使用されることわざ表現である (e.g., X: I heard Sally got tenure. [Sally approaches.] Y: Well, speak of the devil. (Gasser and Dyer 1986: 388)). より多くのデータを観察していくと、当該表現には (1) のような変種が存在することが分かる。

(1) ADRIENNE: She's wearing what? [Heather appears.]

JAMIE: Speak of the slut, and she will appear. (*Lost After Dark* (Film))

従来の研究や辞書等において、このようなタイプの存在は指摘されていない。本研究では、The Movie Corpus と The TV Corpus を用い、*speak of the devil* が the devil 以外にどのようなバリエーションを展開させているのかを調査する。そのうえで、現代英語における当該表現には一定の生産性と創造性が認められることを示す。さらに、国広 (1967) が提唱する「意味の重層性」の観点を踏まえ、the devil 以外のタイプは原型 *speak of the devil* を基盤とした重層表現であることを指摘する。

第2室 (徳望館4階 AT-404教室)

司会 谷光生 (京都女子大学)

非制限現在分詞関係節の派生的性質

高松 龍 (東京大学大学院)

本発表では、管見の限り他の非制限修飾表現と比べ事実分析も理論的考察も十分に成されて来なかった、(1) 下線部のような非制限現在分詞関係節 (non-restrictive Gerundive Relative clauses: NGRs) に着目する。(1) では、NGR が等位接続された名詞句の第一項 *blond hair* にカンマを隔て後置されていることから、名詞句の非制限修飾の一種であり、副詞的な分詞構文と異なる。

- (1) He had blond hair, beginning to go grey, steel-rimmed glasses, a pleasant, mobile face, and a dry sense of humor. (R. Preston, *The Hot Zone*)

本発表では、まず意味や可能な先行詞、生起位置など基本的な事実分析を行い、中でも (2)-(3) のように主節の内容、推論により導かれる内容をそれぞれ先行詞とする NGRs の下位類の存在に着目する。

- (2) The siren sounded, indicating that the air raid was over. (Quirk et al. 1985)

- (3) Three out of four children as young as 12 dislike their bodies and are embarrassed by the way they look, increasing to eight in 10 young people aged 18 to 21.

(*The Guardian*, Jan. 1, 2023)

こうした下位類の存在について Kajita (1977, 1997) の動的文法理論の観点から考察し、言語事実も踏まえこれらが派生的な構文であることを主張する。

英語の「特別用法」の *it* をめぐって—日本語の指示表現との関連から—

山本茉莉 (同志社大学大学院)、山内信幸 (同志社大学)

本発表では、日本の学習英文法の枠組みで「特別用法」とされる「時間」、「天候」、「距離」、「明暗」などを表す英語の *it* (以下、「状況 (環境) の *it*」) を取り上げ、状況 (環境) の *it* には、日本語の後方照応的指示表現に類似した談話機能が存在すると主張する。具体的には、両言語には、後続文脈を指示し、談話の舞台を提示する談話機能 (cf. 山本・山内 2023) があるという仮説を検証する。

- (1) It was half-past five before Holmes returned. (Doyle, 1890: 37)

- (2) これは、わたしがまだ世の中をほとんど知らなくて、(中略) 子供の頃の話になる。(松浦, 2018: 2)

(1) は状況 (環境) の *it* が、(2) は日本語の *こ* 系の指示表現が談話冒頭で用いられる例である。(1) や (2) のような指示表現を談話冒頭で用いる状況描写の方が、指示表現を用いない状況描写と比べ、後続文脈において状況 (環境) が長く持続すると仮定し、計量的検証を試みる。日英語に共通した指示機能を用いた談話機能の存在を確認することができれば、「特別」とされる *it* の用法と「一般的な」指示機能を持つ *it* の用法を包括的に取り扱う可能性の提案につなげることができる。

パラダイム内ギャップへの補完操作とその拡張力の段階性:
people worldwide から people globally への拡張プロセスを事例に
松田 佑治 (名古屋学院大学)

本発表では、動的文法理論 (Kajita (1977, 1983, 1997, 2002), 梶田 (1986, 2004) など) に立脚した「パラダイム (paradigm) 内のギャップ (gap) を埋める操作」(河野 (1984), 大室 (1991), 谷 (2019)) に対して、その形成原則と条件体系を課し、ギャップを埋める拡張力に段階性を与えることを提案する。そして、people worldwide から people globally への拡張プロセスをその一例として提示する。さらに、林 (2022) で扱われた people globally などの名詞を後置修飾するような -ly 副詞には、(1c) のように容認度が下がるものが存在することを指摘する。

- (1) a. Many people worldwide/nationwide are expected to lose their jobs.
- b. Many people globally/nationally are expected to lose their jobs.
- c. Many people ?centrally are expected to lose their jobs.
- d. Many people locally are expected to lose their jobs.

本発表では、(1b) は (1a) をモデルとして拡張したものであり、(1d) は globally の反意語としての拡張したもの (Jackendoff (1990: 114), 二村 (2012: 35), 滝沢 (2017: 154)) であると主張する。なお、centrally の容認度が下がるのは、worldwide/nationwide のようなモデルを欠いていることが一因である。

シンポジウム (徳望館 4 階 AT-401 教室) 15.35 – 17.45

テーマ 「現代英語に見る歴史の痕跡」

司会 野村忠央 (文教大学)

英語語法文法研究において、英語語法文法学会は主に現代英語の記述的、共時的観点から研究を進めているが、言うまでもなく、言語現象の解明においては通時的観点も同様に重要である。この点、現代英語は近代英語と 1900 年をまたいで歴史的に連続性・親和性があり、実際、過去の大会でも現代英語の研究者であると同時に英語の歴史にも造詣の深い方々の発表がなされてきた。具体的には、シンポジウム第 11 回大会 (2003 年) 「仮定法をめぐって」、第 22 回大会 (2014 年) 「文法化と構文をめぐって」などが催されてきた。

以上も踏まえ、本シンポジウムでは「現代英語に見る歴史の痕跡」というテーマに沿って各講師が興味深い英語の現象を取り上げる。まず、野村講師は導入として英語の経験事実から見た偏流理論、一方向性仮説を再考する。次に、村上講師は定形性という観点からいつも問題となってきた be 動詞の仮定法、命令法の否定形について論ずる。続く家口講師は be bound to, be going to が準助動詞化する過程において、その文法的主語がどのように変遷したかを広く扱う。最後に、保坂講師 (招待) は最も基

本的な動詞でありながら、かつ謎深い *be* 動詞について、存在を表す語彙的本動詞から繫辞あるいは態、相助動詞にいかに変化していったのか、言語進化、文法化の観点から論ずる。

英語の経験事実から見た偏流理論、一方向性仮説

野村忠央（文教大学）

現代英語のある種の経験事実を捉えるためには言語変化の過程を射程に入れねばならない。それらの言語変化を捉える理論として「文法化」(Grammaticalization) 理論をはじめ、従来より、「神の見えざる手」(invisible hand)、「偏流」(drift)、「類像性」(iconicity) など様々な理論が提案されてきた。例えば、文法化理論は 20 世紀後半になって盛んになってきたが、19 世紀のメイエ (Paul-Jules-Antoine Meillet) に端緒を持つ。また、類似の考えは 18-19 世紀のフンボルト (Alexander von Humboldt) やシュレーゲル (Friedrich von Schlegel) も抱き、古くはギリシアまで遡ると言われる。

これらの理論は突き詰めると、「人間言語は変化するもので、かつ、それにはある一定の方向 (directionality)、傾向 (trend) がある」ということを定式化しようとした試みだと言える。以上を踏まえた上で、「一方向性 (Unidirectionality) 仮説」(Hopper (1991)、Hopper and Traugott (1993) など) と「偏流理論」(Sapir (1921) など) はどちらがより適切な言語変化理論であろうか。本発表では時制接辞、助動詞縮約、名詞の複数形、仮定法などの英語の経験事実から広く考えてみたい。

“Be not afraid”—現代英語に残る定形の *be* を考える

村上まどか（実践女子大学）

現代英語の仮定法・命令法は、直説法とは異なり (1a,b) (2a,b) のように文否定の *not* が *be* 動詞に後続せず前置でなければならないこと等を根拠に、十全な定形性が疑われてきた (Murakami 1992; 2020)。

- (1) a. I urged that you not be lenient. b. *I urged that you be not lenient.
(2) a. Do not be lenient. b. *Be not lenient.

が、Visser (1966) 収録の (3) のように (1b) (2b) の語順は古くは適格であった。

- (3) Pray God he *be not* angry. (Shakespeare 1613 *King Henry VIII*)

しかもこの語順は COCA にある (4a,b) のように、文脈によっては現代英語でも用いられ、古風な文体を提示している。とりわけ (4b) は疑似古文である。

- (4) a. If it *be not* so, they remain on board ship till the next morning.

(2016 *Studies in English Literature 1500-1900*)

- b. “*Be not afraid*, tonight everyone goes home for supper.” (2016 *Medal of Victory*)

本発表では仮定法副詞節や命令法における定形の *be* の用法を、現代英語のコーパスによって探求していく。そしてそのような構文が現代でも用いられる理由を、Peters (1983) の ‘emotional *be*’ mode に基づいて考察する。

歴史的変遷からみた現代英語における文法的主語の頻度

家口美智子

本発表は準助動詞 *be bound to* と *be going to* の発達に伴う主語の拡大に焦点を当てる。本来、この2つの準助動詞が文法化を起こす前は主語は生物主語のみが適切な文だったが、意味が希釈するにつれ、無生物主語が現れ、文法的主語 (*to* 不定詞、動名詞、*there*、*what*、*what* 節、*whether* 節、虚辞の *it* 等) が、使用されるようになった実態を COHA を分析して示す。また、使用頻度と文法化が進行し続けている *be going to* に関して *to* 不定詞主語以外は各文法的主語が表す内容 (*agent*、*tense*、*activity*、*interrogation*) が少ないほど文法化の早いステージから使われ、内容が豊かになればなるほど、遅くに現れる。2010年代のデータにおけるこれらの文法的主語の頻度の順序と同じであることを示す。更に、*to* 不定詞主語が、ほとんど使用されない要因を探る。Helsinki Corpus、CLMET、Frown、Flob、Brown、LOB コーパス等を用いて、徐々に頻度を減らしていつている様子を示し、現代英語では母語話者がいる一定の文型以外はほぼ非文であると見なすようになったことを示す。

BE 動詞に刻まれた言語進化の痕跡

保坂道雄（日本大学）

BE 動詞は、英語教育の場では最も基本的な動詞として扱われているが、言語学の世界では最も難解な動詞と言っても過言ではない。その研究の歴史は、紀元前の Aristotle まで遡る。著名な哲学者である Russell (1919) は BE 動詞を取り上げ、*a disgrace to the human race* とまで述べている。形態的側面では、*am*、*are*、*is*、*was*、*were*、*been*、*being* と単一の動詞とは思えない変化形を持ち、意味的側面では、*Dr. Jekyll is Mr. Hyde*. における主語の同定に問題が生じ (Jespersen 1924)、統語的側面では、**John_i is his_i cook*. の非文法性 (*John_i met his_i cook*. であれば問題ない) の説明に窮する (Moro 2017)。

本発表では、こうした問題に関して、言語進化と文法化の観点から説明を行う。その上で、*There was no one living in the house. There was no furniture left, and there were some rats running about.* (安井・安井 2022) に見られるハイブリッドな構文が存在する理由について議論を進める。本来「存在」を意味する本動詞であった BE 動詞が、なぜ語彙の意味を持たないコピュラや進行形・完了形・受動態の助動詞の機能を持つようになったかを、英語の歴史的变化を包含する言語の文化進化の視点に立って説明を試みるものである。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
会長	中澤和夫			
事務局長	西脇幸太			
会計	佐藤健児			
会計監査委員	吉川裕介			
運営委員	五十嵐海理 住吉 誠 濱松純司 山本 修	大竹芳夫 出水孝典 前川貴史 吉川裕介	金澤俊吾 中澤和夫 松原史典 吉田幸治	吉良文孝 西脇幸太 山岡 洋
編集委員	大竹芳夫（編集委員長） 大橋 浩 須賀あゆみ 西田光一 家口美智子	大室剛志 滝沢直宏 野村忠央 山岡 洋	金澤俊吾 中澤和夫 林龍次郎 吉田幸治	吉良文孝 中山 仁 松村瑞子

発行日	2023年9月16日
編集・発行	英語語法文法学会
代表者	中澤和夫
事務局	〒485-8565 愛知県小牧市大草 5969-3 愛知文教大学人文学部人文学科 西脇幸太 研究室内 TEL : 0568-78-2211（代表） FAX : 0568-78-2240（代表） Email: segu.office@gmail.com URL: http://segu.sakura.ne.jp
振替口座	02260-0-70393 英語語法文法学会 © 英語語法文法学会